

七月例会

昭和四十年七年三日(土)午後一時より

於・京大文学部第一講義室

近代英国史私観

越智 武臣氏

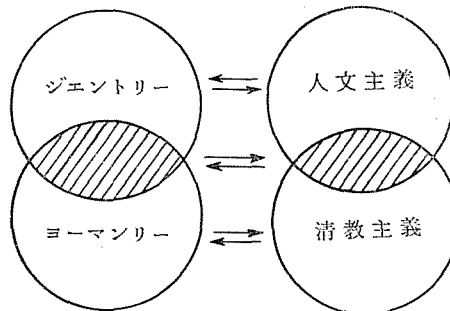
近代英国のイメージをどう描くかという
 ことは、いわゆる「近代化」問題の焦点と
 して、歴史学的にはかなり重要な問題であ
 る。従来通説によると、その骨子はだいた
 い次のように構成されてきた。すなわち、
 中世末期から近代の初頭にかけて、英国の
 胎内には、中産的生産層なる新しい社会層
 が孕まれる。具体的には、それはヨーマン
 リーに比定されるわけであるが、近代英国
 の形成過程とは、この階層の自己運動⇨両
 極分解として扱えられ、とくにその上昇部
 分には、近代化のトレイガーが見出されてく
 るのである。しかも、思想的には、これ
 らヨーマンこそ、清教主義の旗手として、
 これに一種エーティシユな役割りさせふり
 当てられる。ここで、ウェーバーの理論が
 つぎ木されていることについては、いまま
 でもないであろう。かくて、英国史は、「近

代化」の典型として、いわゆる「近代化」
 判定の尺度となり規準となってきた。少な
 くとも、そういう印象を与えたことは、蔽
 うべくもない。

さて、事実はどうであるのか。まずウェ
 ーバーの理論、いわゆる禁欲説と資本主義
 精神の関係については、私見によるかぎり、
 英国史に関しては、到底それは実証的批判
 にたえうるものではない。清教主義を禁欲
 説で掬おうということが、どだい無理であ
 るのみならず、その思想の陰影を考えれば、
 清教主義はむしろ、資本主義発展の前に凋
 落しゆく思想と考えるべき多くの理由があ
 る。またヨーマンリーはどうか。これもし
 ばしば表象されてきたように、近代のトレ
 ーガーとみるよりも、大勢としては、近代
 のなかに埋没してゆく階層とみるべきであ
 る。それは、十六世紀ヨーマンリーの分析
 から帰納される。その意味でこそ、清教主
 義とヨーマンリーはベアすべきものである
 と、考える。

ところで、近代英国にドミナントなもの
 は、もはやいうまでもなく、英国とともに
 プロヴァービアルな、あのジェントリーと
 いう階層である。その思想的背景は、これ

もいろいろ問題はあろうが、まず大ざっぱ
 にいえば、かの人文主義といわれるもので
 ある。近代英国に支配的なのは、まずこの
 階層とこの思想であることは、徹底して考
 えておく必要がある。そうはいっても、ド
 ミナントであるということ、必ずしも「近
 代的」であるということではない。むしろ



そこに英国的個性があるということがいい
 たいところであるが、ただ、ここで興味か
 あるのは、そうした二つの社会層なり、そ
 れとベアする思想パターンがある場合に、
 かならずそこにオーヴァーラップする面が

あるということである。おそらくは、そこに真の意味での近代のトレーガーなり、近代思想がみられるということではないか。この図において影になるところであり、思想上においてはそれがいわゆる経験論というものであろうし、社会経済史上においては、いわゆる「ブルジョワジー」とでも名付くべきものであろう。しかし、いずれにしても「近代」という抽象物はない。あるのは「近代英国」というものが実存するにすぎぬ。その形成過程は、すぐれて個性的であり、尺度以前のものである。われわれはそれを認識し提示する。またそれ以上何ができるといえるのか。まず、国民史的相対性のきびしさに立つということが、同時にすぐれた教示でもあるのだ。(越智)

フランスの古城めぐり 藤枝 晃氏

——スライド使用——

(発表内容は、近く本誌に掲載予定)

十月例会

昭和四十年十月二日(土)午後一時より

於・京大文学部第六講義室

フランスにおける農村景観の改変

谷岡 武雄氏

農村景観とは、ルーラルな地域において、生産的・非生産的土地占居によって生ずる可視的な地表現象の総体をさす。これへのアプローチには、マルク・ブロックのような社会経済史的なもの、非歴史の因子を重視する地形学者によるもの、自然・経済・社会に条件づけられた存在と考えるドゥマンジョン以来の伝統的な立場によるもの等があげられるが、近年は景観の合理的な改変に關して、応用地理学 *Geographie appliquée* (au active) 的な研究がかなり進んできた。

農村景観は、具体的には農村集落と農地景観とによって構成されている。前者について見るならば、純粹の分散または集中のごとき単純構造よりも両者の複合から成るものが最近増加してきた。都市近郊地域において、*orie* どうか *lotissement*, *quartier* などの名で呼ばれる計画的な住宅団地の出現が、この傾向を強めている。集落型の伝統的な境界線をなしていたドゥマンジョン線も、そのために蔽密さを失った。またサイロの設置された集落が、その支配圏を拡大させるに至った。

他方、きわめてルーラルな地域においては、農業労働者、ついで農業経営者の都市

への流出により、散居農場はさびれ、集居部が相対的に地位を高めている。散居地域における人口の老年化と廢屋の出現は著しい。

第二に、農地景観の改変が問題となる。

フランスの農業は *Polticulture* を特色とし、土地所有関係は複雑で、農地の *parcelle* は細分されて、しかも錯圃をなし、*enclave* が多く、これらが農業構造改善事業の中核をなす動力化・機械化を著しく妨げている。

第二次大戦後、農業の動力化は急速に進み、トラクターはたいいていの農家で利用されるようになったが、中小機械はともかく、コンバインのごとき大型機械の普及には、なお種々なる障害がある。そうして、かかる農業の動力化・機械化をこれほどまで推進し、その発展にとって今後とも必須の条件をなすのが、農業の共同化と農地の再編成ではなからうか。

十九世紀末以来進められてきた農業の共同化には A・B・C・D の四型とそれらの種々なる組み合わせが区別され、なかでも農業機械の共同購入・利用を目的とする C 型の CUMA が、大きい役割を果たしている。

これに対し、農地の再編成事業（区画整理と交換分合）は、ヨーロッパの他の国より遅れているが、第二次大戦後に急速調となり、一九六三年末には総農地面積の二六%に及ぶに至った。しかし、それにも地域的差異が著しく、パリ盆地を中心とするオーブン・フィールド地帯では進んでいるが、他の地域では、地形的・技術的・土地利用上の理由などのためさほど盛行していない。

日本書紀素材論

上田 正昭氏

「日本紀」についての文献批判は、たんにその作為を明らかにすることにとどまるものでない。作為の実態をみきわめるためにも、作為の前提をたしかめることが必要となる。津田史学に残された課題のひとつも亦そこにある。

「紀」は、なんらの素材なしに編纂されたものではない。そのことは、引用書目に

内外の史書・記録類が記述されているのをみても疑えない。また引用書目が明記されていない場合についても、「百濟本記」や「魏志」などによったことが指摘できる箇所も少なくない。そしてそれらの引用史料の性格なり、成立時については、これまでの研究でかなり具体的に追求されてきている。

ところが、「紀」の分註にみえる無書名の引用史料の検討は、まだ十分にはなされていない。そればかりか「本朝書籍目録考証」の分布表が無批判に利用されている現状である。そこで「紀」の基礎的考察に関する作業のひとつとして、改めて「紀」に引かれる「一書曰」「二書云」「三云」「一本云」「或本云」「或云」「旧本云」「別本云」「或所云」の分布を再確認し、それら史料の内容と性格を考察することが必要となる。

「紀」の分註については、岩橋・坂本兩博士の見解に代表されるように、非本註説と本註説が対立している。しかし、基本的に奏上本に分註が存在したことは、坂本博士があげられた例以外にも、本文が分註と補充しあい、かつ分註を前提として本文が執

筆されたとみなしうる例（7）およびこれを支持するその他の史料（5）からも、確認しうる。

もとよりそれらの分註に引用される史料のすべてが、もとの姿をそのままにとめているわけではない。すなわちあるいは、本文化したり、あるいは「紀」編者の手で改作されている場合もある。しかしおよそは、「紀」編纂時に存したものとみなされる。ところで、分註にみられる前記無書名の引用史料の、「紀」における分布の状態はどうなっているか。和田博士の整理とは異なつて、「一書」の類（書系統）と「或本」「一本」「旧本」「別本」の類（本系統）の分布には、きわめて注目すべき分布上の相違が認められる。雄略（卷14）以降に本系統が濃厚であり、それらの内容には朝鮮関係伝承や干支や年月にかけた夷録風のものが多い。書系統が比較的に王室の系譜・神統譜ないし宮廷の儀礼・信仰を媒介とするものが少なくないのときわめて対照的である。

そしてそれらに登場する氏族名は58におよぶが、卷14以降の本系統においてそれは具体的であり、氏姓名の表記法などにも家

伝的要素が見出される。18氏の墓記と関係ある氏も7氏あり、冠位名にも大化五年後

のものを含んでいる。本系統の所伝には、紀編纂時に比較的近い時期のものを含んで

いたことが注目される。とくに「或本」は、孝徳(巻25)―天智(巻27)に集中しており、

「紀」本文よりも「或本」の所伝に注目すべきものがあることが指摘できる。いわゆる

大化改新を叙述する「紀」編者の態度の一斑が、分註引用所伝の内容と性格の分析からも窺いうる。なお詳細は、京都大学教養部の『人文』に発表する予定である。

(上田)

学会消息

読 史 会

五月例会

五月八日(土)午後一時より

於・京大文学部第六演習室

主従結合編

春季大会

元明太上天皇の崩御――八世紀における皇権の所在――

岸 俊男

狂言固定期の社会動向と現存テキストの階級

松尾 寿

性 戦国の城下町

松山 宏

近世沖繩政治家の思考様式

井上 秀雄

政友会の発展――原内閣にいたる――

山本 四郎

柳田史学批判の批判

竹田 聰洲

中国における歴史研究――一九六四年北京科

門脇 禎二

学シンポジウムに参加して――

〈特別報告〉

平城宮出土の木簡について

六月例会

六月五日(土)午後一時より

於・楽友会館

北島親房について

七月例会

七月一日(土)午後一時より

於・楽友会館

九月例会

九月一日(土)午後一時より

於・楽友会館

欧米の日本史研究瞥見

一〇月例会

一〇月九日(土)午後一時より

於・楽友会館

領主と作人再論

領主と作人再論

西洋史読書会例会

於 京大西洋史研究室

昭和四十年五月八日(土)午後一時

ドイツにおける労働者階級の政治化

飯田 収治

昭和四十年五月十五日(土)午後一時

ノルマン征服の諸問題

昭和四十年六月二十六日(土)午後一時

デュルク・ヴァン・ホッヘンドルプの思想

――オランダ植民史断章――

田淵 保雄

東洋史大学院会

七月二日(金)三時半

『東洋史研究』合評会

於・東洋史研究室

岸 俊男

柴田 実

赤松 俊秀

鈴木 利章

田淵 保雄

飯田 収治

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

鈴木 利章

愛宕論文 担当者

藤田 敬一

梅原論文 担当者

佐竹 靖彦

宮崎論文 担当者

狭間 直樹

七月六日(火) 一時

民科一〇四号 合評会(於研究室)

佐竹論文

上田 早苗

藤田論文

勝村 哲也

九月二十四日(金) 四時(於研究室)

『東洋史研究』二四一—号 合評会

金城論文

狭間 直樹

中世史研究会

七月二十五日

於 名古屋大 東洋史研究室

戦国—秦漢時代に於ける尚賢思想の展開

稲葉 一郎

人文地理学会

第六一回例会

四〇年四月二十四日 於 京都大學文学部

ニュージランドマオリの農業

石田 寛

集村化現象

水津 一朗

米園における都市雑感

松井 武敏

第六二回例会

四〇年六月一九日 於 大阪大学教養部

イラン・アフガニスタンの農村経済

末尾 至行

都市の中核的管理機能説の問題

小森 星児

西ポルネオの原住民村落

海野 一隆

第六三回例会(石川地理学会と共催)

四〇年九月一日・一二日 於 金沢大学教育

学部

富山・高岡工業地域の工業立地と電力

北林 吉弘

東南アジアの旅から

船越 昭生

能登瀬風の丸木舟について

瀬森 利彰

中心機能と領域

西村 睦男

第二日目は金沢市近郊のエクスカージョンが行

われた。

日本地理学会

一九六五年春季大会

四〇年四月三日—五日 於 明治大学和泉校舎

和泉地方における共有山および山郷の分布

大越 勝秋

小字名蒐集の現状

足利 健亮

江戸時代の地籍図に関する考察

木村東一郎

府県地図について

清水 靖夫

地形図上の鉄道表現の変遷について

金沢 敬

古代の都城域と現代の市街地

藤岡謙二郎

西日本における鑿型構造家屋の分布について

氏家 武

三重県以外における真珠養殖の地域構造

小栗 宏

本邦ノリ養殖地域に関する地理学的研究

齋藤 毅

日本の私鉄における貨物輸送の地理学的研究

青木 栄一

昭和三十九年七月山陰北陸豪雨による島根県東

部地方の山くずれ現象

三浦 清

ヴァイヨンダム災害の教訓

竹内 啓一

急坂都市における背山住宅地化に伴う問題点

稲見 悦治

風水害家屋被害の地理学(I)

関口武・円治妙子

都市の危険率

今村 学郎

副都心池袋の形成について

大本 圭野

池袋繁華街の構造

松沢 光雄

人口の都市集中の経済的要因

清水馨八郎

東京大都市域における郊外化の系列と段階

石水 照雄

人口現象からみた日本の三大都市域の都市化

岸本 実

の前線と通勤通学圏

東京周辺地域の母都市への就業依存度

山鹿誠次・長島弘道

北九州市のマスタープランの策定と周縁地域

藤岡謙二郎

の開発

アメリカ都市の発展と病弊 二神 弘
香港工業化における綿業の地位と性格 横山 昭市

南西ドイツ Kaiserstuhl におけるブドウ栽培 佐々木 博
地下水利用形態からみた北アフリカの地域区

分 小堀 敏
古記録からみた西域の河川の消長 保柳 睦美

工業における土地生産性の地域差 板倉 勝高
関東地方における工業化の地域的類型 奥田 義雄

関東地方における労働力の地域的流動 石井素介・蛭田容之

経済成長に伴う関東農業地域の変貌大貫 俊
京浜地域周辺における工業化 井出 策夫

東京西郊における内陸工業の立地について 大塚 昌利

東京湾々頭地域の貯水地と土地造成について 小沢 利雄

信濃川下流新津郷の農業水利 磯部 利貞

富山平野の三大扇状地の合口用水の成立と発 北林 吉弘
電

山村の変容―岩手県山形村の例― 杉本尚次他
渥美半島の温室園芸 松井 貞雄

鹿島半島南部砂丘地の堀下田の経営と畑作経

営

南佐久における高冷蔬菜の主産地 中島 隆広
観光産業の地理的研究 加藤 武夫
京葉臨海工業地帯の造成による農業への波及 近藤 正気

効果 菊地 利夫
その他気候・地形・陸水関係の発表及びエクス
カーションが行われた。

一九六五年秋季大会

四〇年一〇月二二〜一二月二日

第一班北九州の都市と工鉱業、第二班干拓の地
理學的研究、第三班火山地形と火山地域の土地
利用、第四班南九州の自然と産業、第五班沖縄
の自然と人文、の各班に分れ、現地討議を中心
としたエクスカーションが行われた。

芸能史研究会 第二回大会

五月二日(日)午前十時より

於：京都府立総合資料館

昭和の太鼓踊について

小歌おどりとかぶきおどり

遠州の茶会とその施設

世阿弥の芸術論

〈シンポジウム〉

京都の民俗芸能

五来 重・竹田聰洲・平山徹治郎

岩井 宏実

小笠原恭子

中村 昌生

梶原 猛

井上頼寿・上田正昭

宝曆天明期戸内諸藩の経済政策と商業資本

近世中期における最上川水運と商品流通

宝曆期の位置づけについて

佐々木潤之介

歴史学研究会 一九六五年度大会

五月十五(土)・十六(日)日

於：立教大学

〈第一日〉総合部会「東アジア歴史像の検討」

報告者 遠山茂樹・大江志万夫

〈第二日〉分科会

古代 古代における階級と身分

総論

氏姓制と部民制

新羅の骨品制

漢代における「姓」と身分

中世 領主制についての方法的検討

領主制についての課題と方法上での問題

十一揆をめぐる

近世 維新変革の起源―宝曆・天明期の諸
問題―

宝曆天明期に関する研究史・問題点の整理

徳川中期の経済思想―「国益思想」の成立―

宝曆天明期戸内諸藩の経済政策と商業資本

近世中期における最上川水運と商品流通

宝曆期の位置づけについて

佐々木潤之介

西嶋 定生

前川 明久

井上 秀雄

尾形 勇

稲垣 泰彦

北爪真佐夫

近代 世界資本主義における後進国の階級構造
而非非ポナバルティズム社会構成の原型形成
——ライオン繊維工業直接的生産者の「三月運
動」を中心として——
川本 和良

形成期帝国主義下における清末の階級構造
中村 義

日本帝国主義下の朝鮮労働事情——一九三〇
年代を中心として——
権 寧 旭

現代 帝国主義とアジア
アメリカの戦後政策をめぐって
清水知久・山極 晃・斎藤 孝

インドネシアの独立と民族運動
増田 与

ヴェトナム8月革命とフランス
加藤 晴康

奈良国立文化財研究所 開所記念講演会

五月二二日(土)午後一時半

於・奈良国立文化財研究所

名物製とその背景について

大化蕪葬制についての一考察

奈良市街の変遷について

守田 公夫

横山 浩一

工藤 圭章

大谷史学会 春季大会

六月十二日(土)午後一時より

於・大谷大學図書館

逆修とその歴史的意義

中国古文物雜感

五来 重

小野 勝年

キリスト教史学会 第十六回大会

七月二日(金)〜四日(日)

於・長崎市 親和銀行大波止支店・長崎県立図
書館

〈第一日〉共通論題「長崎とキリスト教」
元和三年キリシタン文書について 松田 毅一

耶蘇教叢書「けれど」について 入江 潛

長崎外町と浦上の換地問題について
D・パチェロ

プティジャンについて 助野健太郎

一六〇〇年から一六一四年にかけての長崎にお
ける修道院と教会

アルカディオ・シェワデー

John Liggins と長崎 重久篤太郎

C・M・ウイリアムズについて 伊沢平八郎

フルベツキの宣教書簡について 高谷 道男

C・M・ウイリアムズの訳書と著書 矢崎 健一

〈研究発表〉
アナバプテストとバプテストにおける契約思
想について 小林 昌明

都市教会の性格について 川崎 肇

日本プロテスタント史研究の課題と方法 波多野和夫

初期のアウトグステイナスにおける恩恵思想
宮谷 宣史

〈第二日〉〈研究発表〉

割礼の世界史的意義 田口 欽二

京都看病婦学校におけるJ・C・ペリーとL・
リチャード 長門谷洋治

キリシタンにおける人格観の背景 小山 恵子

アルメン・ビーベルについて 松本富士男

秩父観音札所とキリスト教 矢島 浩

メキシコ国立古文書館所蔵日本関係記録
佐久間 正

ニューイングランド神学と合理主義 曾根 曉彦

The Unity of The Church According to
Gerard Groote T・V・ザイル

聖書の口語訳 椋 源一

ファン・デ・ヘスリースの日本語文典について 野間 一正

軍人伝道者としての波多野貞夫氏について 峰崎 康忠

オニールの宗教観 新山 妙子

幕末期破邪史料に見える「地球」問題 吉田 寅

ネロとキリスト教迫害に関する伝承の展開 秀村 欣二

バルセポリスの遺跡を訪ねて 三笠宮崇仁

〈公開講演〉
鎮園について 海老沢有道

日本語の多様性とキリシタン
〈第三日〉 土井 忠生

見学 二六聖人記念館・長崎市内キリスト教
遺跡・島原半島キリシタン史蹟

三田史学会 大会

十月九日(土)午後

於・慶応義塾大学三田西校舎

福沢諭吉の宗教観

佐志 伝

スペイン回教徒追放問題——バレンシアを中
心に 岩谷十二郎

越南人の起源

松本 信広

ソロモン諸島の旅から

伊藤 清司

上智大学史学会 第十五回大会

十月二十三日(土)・二十四日(日)

於・上智大学

〈公開講演〉

幕末維新の日瑞関係——ベルン連邦古文書館

の日本関係史料——

中井 晶夫

明治維新と西洋文化

大久保利謙

〈部会研究発表〉

ルイ十三世下の社会とジャンセニスム

推古期の政治改革についての一考察——對外
事情よりみた—— 国府田 武

松本 肇

フンボルトの大学論とベルリン大学設立

水谷 重男

イギリス留学時代の森有礼の手紙の一考察

織田 陽二

中世宗教裁判に於ける異端鎮圧理念について

漆原 隆一

Bretvalda について

朝倉 文市

ミルトンの“Of Preteritcal Episcopacy”

についての一考察 仲田 孝男

アイルランドの飢饉(一八四五—四七)

高橋 裕之

Hengist と Horsa について

渡部 昇一

戊辰内乱期における日米関係の様相

久保田恭平

華南史研究に関する問題点

白鳥 芳郎

私教史学会 第十七回学術大会

十月二十日(日)午前十一時より

於・花園大学

明治初年仏教徒のキリスト教批判について

福島 寛隆

「タイ国サンガ湾」の改正をめぐって——仏教

と政治に関する一考察—— 石井 米雄

本朝法華験記に現われた持経者について

佐々木孝正

各種法人上然伝所載の「醍醐本」二期物語

藤堂 恭俊

圭峯宗密の法系について

柳田 聖山

鎌倉仏教をどう見るか

古田 紹欽

〈資料展観〉

近世禅林墨跡

解説 森 嶋

広島史学研究会、中国四国歴史学・地理学協会、

日本社会科教育研究会 連合大会

十月二十三日(土)・二十四日(日)

於・広島大学

(第一日)

シンポジウム「世界資本主義成立期における東

洋と西洋」

列強資本主義と維新変革——明治維新の再評

価 太田 健一

清末の変革と外国資本主義

横山 英

産業資本の確立と植民地・従属国の問題——

小イギリス主義・植民地改革から帝國連合へ

山下 浩

〈公開講演〉

「アジア的生産様式」と生産様式の「アジア

的」特徴 飯沼 二郎

因地制宜——人民中国の地域開発と地域生産

総合体 河野 通博

〔第二日〕

〈日本史部会〉

史記に從い神武天皇を素描する 水野 惟之
国家仏教の成立時期 橋本 政良

公田官物率法の成立に関する二、三の問題に
ついて 坂本 賞三

瀬戸内海史上における敵島合戦 河合 正治

西南地方における分国法の一考察 熊田 重邦
貫高制と石高制——豊後を中心として—— 竹本 弘文

西廻り海運開発に関する二、三の問題 脇坂 昭夫

領主権による流通機構の統制と封建的取巻
——福山藩綿の流通を中心として—— 藤井 正夫

〈東洋史部会〉
華胥氏及び華胥について 熊谷 治

漢訳大方等大集経日藏分星宿品八之二記載の
十二星座神 大西 正男

宋代の工匠とその組織 古林 森広

宋代の村落共同体 河原 由郎

文献通考・経籍考の史料の価値に関する一考
察 山内 正博

元代における監察官制の特色について
丹羽友三郎

明清時代における村落社会の秩序——顔役の

性格をめぐる——

清代の漕運論議とその背景 藤原 康晴
清代の塘長性について——海塘管理の一斑—— 中原 晃雄

アジア的生産様式論再検討の意義 森田 明
高橋 武雄
漢初の刑法理論 坂野 長八

〈西洋史部会〉
アテナイ旧四部族の展開過程 向山 宏
コンスタンティヌス改宗の一考察 三木 利英

地中海商業について 佐藤 真典
イギリス封建王制と村落 兼平 昌昭

末期ビザンツと封建制——バルカンの政治状
況を中心に—— 米田 治泰

イスカラ派の分裂について 本郷広太郎

「革命的オプロイテ」とドイツ革命 篠塚 敏生

タイルクス事件における中流商人層 岩間 正光

J・パンヴィルの「第三共和制」論の背景 広津 和生

西・東ドイツ比較史学史研究の試み 吉武 夏男

日本におけるシュメール学の諸題 中原与茂九郎

Heclenotri と Origènes 高山 一十

阿多田島調査報告

富土川下流部における最近の河床低下の実態
と砂利採取との関係について 松本 繁雷

山陰中央部観光の実態と観光開発計画
野本 晃史

徳島県東部の段丘とその形成 寺戸 恒夫

我が国中古における溝渠の構造と労働量の数
的計算 水野 時二

中国晉梁山地の化石周水河地形 赤木 祥彦

広島における都市管理機能とその影響につい
て 東 皓伝

南大東島における地形現象の数例 武永健一郎

瀬戸内地域の工業集積 村上 誠

島・本土・離島 河地 貫一

マオリ族の農業 石田 寛

〈考古・民俗部会〉
広島県藤ヶ迫遺跡群の緊急調査 河瀬正利・藤田 等

山口県熊毛郡平生町東前寺古墳群 川瀬 哲志

広島県尾尻瓦窯址の発掘調査 潮見 浩・榎 博自

草戸千軒町——出土陶磁に見る交易圏——
村上 正名

〈地理部会〉

〈社会科教育部会〉

アメリカにおける社会科カリキュラム現代化

の動向について

現代史学習の一展開

日本近代思想の考え方について

工業高専における工場調査

社会認識教育の歴史的发展

星馬華校用「歴史」課本にあらわれた日中戦

争について

共同研究「中・高校生 of 地理的・歴史的意识・

並びに思考力の変化に関する実験的研究」

——中間報告——

金子廉・北川健次・永井滋郎・福谷昭二

「史林」投稿規定

本誌への投稿規定は次の通りです。ふる

ってご寄稿下さい。

◇資格 本会々員にかぎる。

◇原稿の長さ

◇研究論文 四百字詰五〇枚程度

◇研究ノート 右同

以上には四百字以内の要約と、英文要

約（又は翻訳用要約）添付のこと。

◇資料紹介 随意

◇学界動向 四百字詰三〇枚以内

◇批判と反省 右同

◇書評 四百字詰二五枚以内

森分 孝治

柴田 茂徳

木山 良亮

沢田 真養

徳喜 隆志

星馬華校用「歴史」課本にあらわれた日中戦

争について

共同研究「中・高校生 of 地理的・歴史的意识・

並びに思考力の変化に関する実験的研究」

——中間報告——

金子廉・北川健次・永井滋郎・福谷昭二

「史林」投稿規定

本誌への投稿規定は次の通りです。ふる

ってご寄稿下さい。

◇資格 本会々員にかぎる。

◇原稿の長さ

◇研究論文 四百字詰五〇枚程度

◇研究ノート 右同

以上には四百字以内の要約と、英文要

約（又は翻訳用要約）添付のこと。

◇資料紹介 随意

◇学界動向 四百字詰三〇枚以内

◇批判と反省 右同

◇書評 四百字詰二五枚以内

◇送先 「史林」編集委員会宛

◇なお、「史林」の論文掲載の順序は、い

わゆる巻頭論文制を採用せず、日本史・

東洋史・西洋史・地理学・考古学の順、

各専攻の中では時代順・地域順となつて

います。前もつてご了承お願いいたしま

す。

◇送先 「史林」編集委員会宛

◇なお、「史林」の論文掲載の順序は、い

わゆる巻頭論文制を採用せず、日本史・

東洋史・西洋史・地理学・考古学の順、

各専攻の中では時代順・地域順となつて

います。前もつてご了承お願いいたしま

す。

◇送先 「史林」編集委員会宛

◇なお、「史林」の論文掲載の順序は、い

わゆる巻頭論文制を採用せず、日本史・

東洋史・西洋史・地理学・考古学の順、

各専攻の中では時代順・地域順となつて

います。前もつてご了承お願いいたしま

す。

◇送先 「史林」編集委員会宛

◇なお、「史林」の論文掲載の順序は、い

わゆる巻頭論文制を採用せず、日本史・

東洋史・西洋史・地理学・考古学の順、

各専攻の中では時代順・地域順となつて

います。前もつてご了承お願いいたしま

す。

委員会だより

◇ 四八巻もようやく六号にたどりつきま

した。五号にて、刊行のおくれは大幅に

とりかえしたのですが、またまたおくれ

てしまいました。いろいろな悪条件が重な

ったのですが、四九巻一号は同時に進行

していますので、追いかけてお手許にお

届けできる筈です。

◇ 四八巻にて、計三〇篇の論文、研究ノ

ートを掲載いたしました。その一覧は、

巻末総目録の通りですが、日本史のほか、

東洋史・西洋史・地理・考古学が、それ

ぞれ教員のバランスをとって掲載すること

ができました。これは、本誌創刊いらい

の特色でもあるわけです。来巻も、一層

有益な論考を掲載いたしたく、各位のご

寄稿をお待ちいたします。投稿規定は、

の特色でもあるわけです。来巻も、一層

有益な論考を掲載いたしたく、各位のご

寄稿をお待ちいたします。投稿規定は、

上掲の通りです。

◇ 本号にもまた、現職監事の藤博士の計

報を掲載いたさねばならなくなりました

ことは、まことに哀惜の極みであります。

つつしんで博士の御冥福をお祈りする次

第であります。

◇ 会費について、年末に赤字の方にはの

こらすぐ請求申しあげ、多数ご協力下さ

いまして有難うございました。しかしな

がら、まだまだお払いこみ下さらない方

も多数あります。折かえしお払いこみ下

さるよう、重ねてお願いいたします。

一九六五年一月二五日印刷 定価三〇〇円
一九六五年一月一日発行

史林 (第四八巻第六号)

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

発行所 史学研究会

理事長 田村実造

振替京都五一五五番

京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇

印刷所 中村印刷株式会社